

当院の入院患者への食育の取り組み

○野瀬 可奈子、長谷川 尚郁、西垣 奏一郎、
柳田 憲一

福岡市立こども病院 小児歯科

【目的】

当院に入院している心疾患を持つ患児は、個室管理のために食事が親子だけの時間となることが多い。また長期間の入院により社会的集団生活の経験が少ないケースもある。そこで医療保育士、管理栄養士、看護師、歯科衛生士が中心となって、年齢の近いこども達と一緒に食事ができる場を提供しながら、それぞれの職種から保護者へ情報提供を行うことを目的に、2015年9月より食育教室を開始した。これまでの食育教室についての実態調査を行った所、若干の知見を得たので報告する。

【対象および方法】

2015年9月から2016年7月までに行った7回の食育教室の実施状況、また参加した27名の年齢、性別、心疾患名、症候群の有無、入院状況、経管栄養の有無等について調査を行った。

【結果】

参加者の性別は男児14名、女児13名であった。心疾患別では右心型単心室症が一番多く6名であった。またDown症候群の患児が5名、Kabuki症候群の患児が1名含まれていた。平均年齢は2.9歳であった。食育教室実施日における平均在院日数は76.7日で、中央値は29日、最小値は13日、最大値が637日であった。経鼻経管栄養併用者は2名であった。

【考察】

1回の参加者数は少ないものの、揃って挨拶をして食事を開始する。他児に影響を受けて苦手なものを食べるなど集団保育の効果を得られることができた。また情報提供に加えて保護者同士の情報交換がたくさん行われた。このことから、食育教室は患児、保護者にとって有意義なものであったと考えられる。

当クリニックにおける継続的な

口腔管理システムの再評価

—実地指導に関するアンケート調査—

○田村香里、倉谷華奈、石谷徳人、

徳永まどか、前野孝枝、前田愛里

(医)イシタニ小児・矯正歯科クリニック

【目的】

当クリニックでは小児期からの継続的な口腔管理1)の中で、歯科医の指導管理のもと担当歯科衛生士制を導入しているため、実施指導の充実が管理成功への第一歩と考えている。今回、これらの再評価の一つとして、実地指導に関する保護者へのアンケート調査を行ったので報告する。

【対象と方法】

対象は当クリニックにおいて口腔管理を行っている小児患者の保護者である。対象者の中から無作為に500名を選出し、我々が作成したアンケート用紙に無記名で回答を依頼した。

【結果】

アンケート回答者は478名(回答率95.6%)であった。実地指導の満足度について、「大変満足」の選択が240名(50.2%)と最も多かった。また、実地指導の主な目的について、「むし歯予防」の選択が464名(97.1%)と最も多く、次いで「歯肉炎予防」が12名(2.5%)であった。また、担当歯科衛生士制について、「大変好ましい」と「好ましい」の選択がそれぞれ290名(60.7%)と130名(27.2%)であった。その他、家庭での口腔清掃状況についても把握し、特にフロスにおいては、必要性の認識と実際の使用状況との間に差が見られる等、指導上の問題点も明らかになった。

【まとめ】

今後も歯科衛生士として、継続的な口腔管理の中で成長に合わせた実地指導を積み重ねていくことによって、患児と保護者の口腔の健康に対する意識を向上させ、日常生活の中で、健康増進へと行動変容させるために努力していきたい。

【文献】1)石谷徳人：子どもの継続的な口腔管理の重要性, DENTALDIAMOND, 41(10):136-138,2016.